

◆連載-Vol.27

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年~2014年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

モダニズムの向こうへ その1

池田武邦 ハイテクからローテクへ

高橋鞆一と同年の1924年生まれの建築家に池田武邦がいる。海軍士官から戦後東京大学第一工学部建築学科に進み、卒業後勤務した山下寿郎建築事務所員時代に「霞が関ビルディング」の設計を担当、その後独立して日本設計事務所(現日本設計)を設立した人物である。

「霞が関ビルディング」が竣工した1968年の翌年、建設のストーリーが「超構造のあけぼの」と題して映画化、公開され、文部省特選、科学技術庁推薦を受け、1969年度邦画興行ランキング2位を記録したという。

規模の大きさを比較するのに、「東京ドームいくつ分」と言われるが、それ以前は「霞が関ビル何杯分」と言われた時期もあったほど全国的に広く知られた建物である。

日本初の超高層ビルであり、その建設プロセスはNHKの「プロジェクトX」でも紹介されているのでご承知の方も多だろう。いまでは当たり前のことが、すべて「初めて」だった。例えば外壁面積は膨大になり、そこに吹き付ける雨も大量となる。それが壁を伝って一気に流れ落ちてきたら、エントランスは滝をくぐって入るようになるのではないか。エレベータはケーブルで吊るので、止まるときにケーブルが伸び縮みしないか、各階にピタリと止めることはできるのか。北壁面と南壁面では日射量が違うから鉄骨の伸び方が違うはずであり、建物が曲がってしまうのではないか、などなど。

中でもいちばん心を砕いたのがファサードデザインだった。もちろんディテールや素材の扱いなどにおいても、さまざまなスケッチが繰り返されたのだが、性能や機能に関しては実験などで実証は可能だ。ところがデザインはそうはいかない。もっともスケッチが多かったという。

その結果が現在の外観だ。我が国初の超高層、言い換えれば我が国最古の超高層である。その外観から少しも古さを感じないのは私だけだろうか？

決して目立つデザインではなく、今では都市の「凶」ではなく「地」として見過ごされてしまうようなデザインかもしれない。建設当時、東京タワーに次いで東京では高さを競った建物は、高いと言うだけで存在感があり、外観であえて特徴付けるのではなく、デザインにおいては普遍性を求めたと言い、それがまさ的に的を得ていたことを、いま、改めて評価してもいいように思う。

新宿に限らず、いまや大都市には超高層が溢れかえっており、いずれも外観デザインで差別化しようとしている。これが都市の景観にとってどうなのだろうか、はなはだ疑問ではある。

「霞が関ビルディング」の竣工を待たずして池田は退所し、仲間たちと日本設計を立ち上げ、「京王プラザホテル」(1971)、「新宿三井ビル」(1974)などの超高層を手がけた。「京王プラザホテル」の工事中に現場見学に呼ばれた。今でも記憶しているのはエレベータが自由に使えず、35、6階から階段を歩いて降りたこと。超高層は高くて疲れると思ったが、これは余談。

「京王プラザホテル」の足元周りには武蔵野の趣を感じさせるような外構が施されている。続く「新宿三井ビル」の足元のランドスケープは陶芸家の會田雄亮が担当した。蛇足ながら會田は千葉大学園芸学部出身であり、そこで都市計画を学んだと聞いた。水が流れて清々しい都市空間つくられており、「京王プラザホテル」の外構に対してヨーロッパの広場的な中にも和風の雰囲気があり、ともに超高層が林立する西新宿において、オアシスのような快適な環境をつくり出している。

池田が「霞が関ビルディング」を設計チーフとして担当したのは30代後半である。池田に限らず設計から施工まで、実際の担当者のほとんどが30代であったと思われる。新しい都市景観の「あけぼの」は30代の若者たちによって幕が開けられたのである。

後になって池田自身が語っているように、「新宿三井ビル」のころから超高層に対して疑問を抱くようになったというが、はたして神代雄一郎がかつて投げかけた「巨大建築に抗議する」という一文が原因かどうか、いずれ本人に聞いてみたいと思うのだが、その疑問の答えが1992年に開園した長崎の「ハウステンボス」となって実現したのではないだろうか。

「人と自然が共存する新しい街」という基本的なコンセプトで、テーマパークと言うより、むしろ小さな都市計画と言った方が正確だろう。注目したいのは全体計画や個々のデザインだけではない。雨水は排水溝から処理されるのではなく、地下に浸透して土中で浄化され、運河を通して海へ戻されるという循環システムが用意されていること。また、海岸沿いにはヨットが係留できる分譲住宅が用意されたことなど。池田が海軍士官上がりであり、その後も海外に行ったときに時差ぼけ解消はヨットに乗ることだといっていた池田が、自分の求める暮らしと都市とを結びつけたひとつの提案であろう。

これを個人的な好みと評するべきではない。むしろ没個性的な都市計画が横行する中で、これこそひとつの範とすべき都市計画ではなからうか。

なぜ長崎県が工場用地として埋め立てながらも誘致が進まず、放置されていたような土地を選んだのかとの質問に、「戦争末期、自分が乗艦していた「矢矧」が撃沈され、奇跡的に救助されて収容された病院がこのあたりににあったんだよ。ある意味では恩返しなんだ」と応えてくれた。池田はその後、ハウステンボスの会長も務めた

日本設計がまだ日本設計事務所と名乗っていた設立数年後のことである。「霞が関ビルディング」と「京王プラザホテル」のファサードデザインはまったく異なり、同じ設計者とは思えなかった。事務所が六本木の材木町(今ではこの地名もなくなっている)の小さな貸しビルに入っていたころ事務所を訪ねて池田に、「池田さんらしいデザインとはなんですか」と質問したことがあった。ちょっと考えた後の池田の答えは、「うん、それは日本設計という組織かな。これまでの設計事務所は徒弟制度的なもの残っていて、上の言うことを下が聞かなければならなかった。でも日本設計では年齢や肩書きなど関係

なく、誰でも自由に発言できるようにしたんだ。それが私のデザインだよ」。

また、「新宿三井ビル」に事務所が移り、50階の社長室で話していたとき、塩ビ製の雨樋のことに話が及び、集水器とその下の縦樋とのジョイント部がおかしいということになった。一般的な既製品は縦樋が集水器の下部の内側に入るようになっているが、本来は逆だ。そうしておけばコーキングが切れても雨漏りはしないという。自然の摂理というと大袈裟かもしれないが、自然と合理性とが平行していることを言われたのだと感じた。

巨大な超高層ビルを設計する人がこんな細かいことまで考えていると驚いたものであった。超高層ビルという建築技術の最先端を走り抜け、人の暮らしや自然との関係を深める、そのために最新の技術を駆使したのが「ハウステンボス」だと考えてもいいだろう。

その後C.W.ニコルなどとも交友を深めて自然保護を身をもって実践している。いつまでもお元気で活躍されんことを願う。

(続く)



霞が関ビルディング



京王プラザホテル



上・下/ハウステンボス